



日本人学習者の英作文におけるI使用への影響要因に関する考察 : ICNALEの学習者背景調査シートに基づいて

飯島, 真之

(Citation)

統計数理研究所共同研究レポート, 469:41-52

(Issue Date)

2024-03-25

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100487705>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100487705>



日本人学習者の英作文における I 使用への影響要因に関する考察

—ICNALE の学習者背景調査シートに基づいて—

飯島 真之(神戸大学大学院生)

Factors Influencing I Used by Japanese Learners in English Written Essays

—Based on an ICNALE Learner Background Survey Sheet—

IIJIMA, Masayuki (Kobe University, Graduate Student)

概要

本研究は、アジア圏国際英語学習者コーパス(ICNALE)の英作文モジュール *Written Essays* (2.6)を使用し、日本人学習者が英作文中で多用する主格の一人称代名詞 I の使用量に影響を与える学習者要因に関して考察を行った。分析の過程において、日本人学習者の各作文における I の頻度を目的変数、ICNALE Learner Background Survey Sheet から選択した 18 種の学習者要因(年齢、語学試験や語彙サイズテストのスコア、動機づけ、英語学習経験等)を説明変数として、重回帰分析を実施した。RQ1 では、全変数投入法を、RQ2 ではステップワイズ法を用いて、対象とした日本人学習者の作文すべてにおける I 使用量に関与する学習者要因を総合的に考察した。続く RQ3 では、ステップワイズ法を用いて、習熟度別日本人学習者(A2、B1_1、B1_2、B2+)の I 使用量に関与する学習者要因を考察した。その結果、日本人英語学習者の I 使用量は、全体的な傾向として、アウトプット型の学習に関与する要因によって増加する一方で、インプット型の学習に関与する要因によって減少する可能性があることが示された。

キーワード

self-mention、I、日本人学習者、学習者要因、重回帰分析

1. はじめに

言語使用の際、話し手や書き手は、内容に対してスタンス(stance)を表出し(Biber et al., 1999, p.966)、自らの立場や態度を受け手に提示する。特に英語学分野では、それがどのような下位概念を内包するののかに関して、これまで多くの示唆がなされてきた。具体例を挙げると、Hyland (2005) はスタンスの下位概念として、命題への完全なコミットメントを控える「ヘッジ」(hedges)、発話内容への確信を示し、また、話題への関与や受け手との連帯を示す「ブースター」(boosters)、命題に対する書き手の感情的態度を示す「態度マーカー」(attitude markers)、一人称代名詞使用等に関する「自己言及」(self-mention)の 4 種類を挙げている。本研究は、Hyland が提示するスタンスマーカーの枠組みのうち、self-mention に関する表現に焦点を当て、それらの中でも、英語における主格の一人称代名詞である I に着目する。I を主語にとることで、話

し手や書き手は自身の存在を内容に関与させることができるわけであるが、英語教育の立場に立つと、日本人英語学習者は英作文において I を多用する傾向(場合によっては過剰使用)にあることが、多くの先行研究で示唆されている(小林, 2010; 成田, 2017 他)。先行研究の多くは、学習者コーパスを用いて頻度調査を実施し、学習者と母語話者の比較を通して考察を行っている。しかしながら、各作文を執筆した学習者の背景(年齢、語学試験や語彙サイズテストのスコア、動機づけ、英語学習経験等)が、各作文における I の頻度にどの程度影響しているかについては検証がなされていないようである。そこで本研究では、アジア圏国際英語学習者コーパス(ICNALE)の英作文モジュールである Written Essays(2.6)の日本人学習者データ、及び、ICNALE 学習者背景調査シート(ICNALE Learner Background Survey Sheet)に基づく各学習者の英語学習背景に関するデータを用いて、どのような学習者要因が日本人英語学習者の I 使用量に影響を与えているかを計量的な手法を用いて調査を行う。

2. 先行研究

本節では、これまで実施されてきた、非英語母語話者(主にアジア圏)による、一人称代名詞 I の使用実態に関する研究事例を 4 例取り上げる。下表は、各先行研究が明らかにした知見を、一人称代名詞 I 使用を中心に整理したものである。

表 1. 非英語母語話者による一人称代名詞 I 使用に関する研究事例

先行研究	非母語話者	知見・示唆
小林(2010)	日本	日本人学習者データとして、JEFLL Corpus と ICLE-JP を、母語話者データとして LOCNESS を使用し、学習者の習熟度(学年)が低いほど主格の一人称代名詞 I が過剰使用される傾向を指摘。またコロケーションに関して、学習者が will や can などの現在の法助動詞を好む一方で、母語話者は would などの過去の法助動詞を好む傾向を示唆。
川口・伊東・太田(2015)	日本	日本人データとして、JACET Journal の論文、母語話者データとして、TESOL Quarterly の論文を用いて、2009 年から 2011 年の各年から 7 編ずつの計 21 編ずつを選択。また、人称代名詞使用に関して、日本人英語教員に質問調査を実施。その結果、日本人は母語話者よりも論文における一人称代名詞の使用頻度が低いことや、母語話者が特に質的研究で一人称代名詞を多用する傾向を指摘。加えて、教員への質問調査を通じ、論文における I 使用の是非に関する態度は様々であることを示唆。
成田(2017)	日本	アジア圏国際英語学習者コーパス(ICNALE)の日本人大学生データと英語母語話者データ(大学生・社会人別)を使用し、I を含む、6 種の主格の人称代名詞の頻度調査を実施。日本人学習者の一人称代名詞の総頻度は母語話者を上回り、また、習熟度別にみると B2 レベルになると低下する。また I の後続語に関して、日本人は think を多用するが、母語話者は feel や believe も使用。
Firdaus, Soemantri, & Yuliawati (2021)	インドネシア	インドネシア人研究者が執筆した、言語学及び応用言語学分野の論文 200 種類(2017 から 2021 年に出版)を集め、self-mention markers となりうる I を含む 6 種の一人称代名詞(活用形を含む)の頻度を調査。その結果、I は we に次いで 2 番

		目に高頻度な人称代名詞であることを指摘。また I を含む self-mention は論文の中でも特に、手法の説明において頻繁に使用されることも示唆。
--	--	---

上記の先行研究は、非英語母語話者による人称代名詞使用を、コーパスを用いた頻度調査を通じて明らかにした点で示唆に富む。特に、学習者コーパスを活用し、日本人学習者の人称代名詞使用実態を考察している、小林(2010)及び、成田(2017)は、習熟度別にもデータを調査しており、本研究の主たる関心である、日本人学習者の I 使用実態に関して多くの示唆を与えている。

上表からも分かるように、ICNALE 等の現行の主要な学習者コーパスを用いた人称代名詞の頻度調査は、すでに過去の先行研究において実施されている。そこで本研究では、学習者コーパスの作文データを執筆した各学習者の背景(年齢、語学試験や語彙サイズテストのスコア、動機づけ、英語学習経験等)に着目し、それらが、各学習者の産出する人称代名詞 I の使用量にどのように影響を与えているかを計量的に調査する。

3. リサーチデザインと手法

3.1 研究目的と RQ

本研究は、日本人英語学習者の英作文における人称代名詞 I の使用量には、どのような学習者要因が影響しているのかを明らかにすることを目的とする。本研究における研究設問(RQ)は以下の通りである。

RQ1 想定される学習者要因すべてを考慮した場合、それらが I 使用量にどのように影響するか

RQ2 日本人学習者全体の I 使用量に、特に影響を与える学習者要因は何か

RQ3 習熟度別日本人学習者の I 使用量に、特に影響を与える学習者要因は何か

また、総合考察として、RQ から得られた結果が、学習者によって書かれた個別の英作文においてもみられるかを検証する。以上により、日本人学習者による主格の一人称代名詞 I の使用実態を、学習者要因との関連を踏まえて考察する。

3.2 データ

3.2.1 使用するコーパス

本研究では、アジア圏国際英語学習者コーパス(ICNALE)における Written Essays(2.6)の日本人学習者データを使用する。当該コーパスは、神戸大学の石川慎一郎氏によって開発されたものである。当該コーパスの主な特徴は、各学習者に対して、「大学生アルバイトの是非」と「レストランにおける全面禁煙の是非」に関する2種のトピックに関するエッセイを、各エッセイにつき20分から40分で、辞書を使用することなく、200から300語で執筆を依頼することで、変数を徹底的に統制したデータ収集を図っていることである(Ishikawa, 2023)。加えて、TOEIC等の語学試験や語彙サイズテスト(VST)のスコアに基づき、各学習者を4段階の習熟度(A2、B1_1、B1_2、B2+)

に分類している (Ishikawa, 2023)。さらに、各作文の執筆に関わった学習者の英語学習背景に関するデータが、ICNALE 学習者背景調査シート (ICNALE Learner Background Survey Sheet) に記載されており (本研究では現行の Ver. 202306 を使用)、本研究が使用する学習者要因に関するデータは、すべて当該シートの情報に基づいている。なお、本研究が使用するこれらのデータはすべて、ICNALE のウェブサイトから無償でダウンロードすることが可能である。

3.2.2 データの事前処理

本研究では、どのような学習者要因が、日本人の英作文における I 使用量に影響を与えるかを調査する。そのため、ICNALE Learner Background Survey Sheet において、本研究が対象とする学習者要因に関する情報がすべて記載されている学習者の作文データにのみ焦点を当てる。したがって、本研究では、Written Essays モジュールに含まれる日本人学習者の作文データすべてを使用しているわけではない。また、当該モジュールでは、各学習者が 2 種のトピックの作文を執筆しているが、本研究では、それらのうち、多くの日本人学習者にとってより身近な話題であると推測される「大学生アルバイトの是非」のトピックに関する作文にのみ調査対象を限定する。下記の 2 表は、それぞれ、本研究が使用する習熟度別学習者の作文数と本研究が対象とする各学習者要因を整理したものである。

表 2. 本研究が対象とする習熟度別日本人学習者の作文数

学習者の習熟度段階	作文のトピック	作文数
A2	It is important for college students to have a part-time job. (大学生アルバイトの是非)	31
B1_1		36
B1_2		18
B2+		14
合計		99

表 3. ICNALE Learner Background Survey Sheet 内の本研究が対象とする学習者要因

No	学習者要因	概要
1	Age	学習者の年齢
2	TOEIC	TOEIC のスコア
3	VST	Vocabulary Size Test: 語彙サイズテストのスコア
4	INTM	Integrative motivation score: 統合的動機づけの程度
5	INSM	Instrumental motivation score: 道具的動機づけの程度
6	Primary	小学校でどの程度英語を使用してきたか
7	Secondary	中学校・高校でどの程度英語を使用してきたか
8	College	大学でどの程度英語を使用してきたか
9	Inschool	どの程度学校内で英語を使用してきたか
10	Outschool	どの程度学校外で英語を使用してきたか
11	Listening	その程度リスニングを学習してきたか
12	Reading	どの程度リーディングを学習してきたか
13	Speaking	どの程度スピーキングを学習してきたか
14	Writing	どの程度ライティングを学習してきたか
15	NS	どのくらいの頻度でネイティブスピーカーから英語を教わってきたか
16	Pronunciation	どのくらいの頻度で英語の発音を教わってきたか

17	Presentation	どのくらいの頻度でスピーチやプレゼンテーションを教わってきたか
18	EssayW	どのくらいの頻度で英作文を教わってきたか

なお、上表の項目 4(INTM:統合的動機づけ)及び項目 5(INSM:道具的動機づけ)については、各参加者にアンケート調査を実施し、動機づけに関する 12 項目 (INTM に関連するものが 6 項目と INSM に関連するものが 6 項目)に関して、6 段階で自己評価を依頼し、関連項目の評価結果を平均化することで算出した値に基づいている (Ishikawa, 2023)。また、項目 6 から項目 18 に関しても、同様に各参加者にアンケート調査を実施し、これまでの L2 学習歴に関する 22 項目について、6 段階で自己評価を依頼し、関連項目の評価結果を平均化することで算出した値に基づいている (Ishikawa, 2023)。以上、本研究では、表 2 で示した習熟度別日本人学習者の各作文 (計 99 種類)における一人称代名詞 I の使用頻度と、表 3 で示した 18 種の学習者要因の関係に着目する。

3.3 手法

はじめに、各 RQ の調査に入る前に、表 2 で示した 99 種の各英作文における人称代名詞 I の使用頻度 (I 使用量)を調査する。頻度調査には、AntConc (4.2.4)を使用する。

以下、各 RQ に関する手法を概観する。まず RQ1 では、習熟度に関係なく、調査対象とする全 99 種の作文 (表 2)に関して、各作文の I 使用量を目的変数、各作文を執筆した学習者の 18 種の学習者要因 (表 3)の得点を説明変数として、重回帰分析を実施する。なお、RQ1 では、あえて全変数投入法を実施し、18 種の学習者要因が、I 使用量にどのように影響するかを調査する。

次に、RQ2 では、RQ1 と同じデータに対して、ステップワイズ法を用いた重回帰分析を実施する。ステップワイズ法とは、全変数投入法とは異なり、事前に用意した変数の中から統計的妥当性の高い変数のみを選択してモデルを作成する方法である (石川・前田・山崎, 2010)。

最後に、RQ3 では、4 種の習熟度段階別 (表 2)に、各作文の I 使用量を目的変数、各作文を執筆した学習者の 18 種の各学習者要因 (表 3)を説明変数として、ステップワイズ法による重回帰分析を実施する。RQ2 で示された日本人学習者全体における I 使用量モデルが、習熟度別に見た場合どのように変化するかを考察する。

なお、RQ2 及び RQ3 共に、重回帰分析には、HAD (Ver. 18)を使用する。また、ステップワイズ法を実施する際、変数の投入基準をデフォルト設定の 0.05 を 0.1 に変更する。

4. 結果と考察

4.1 RQ1 全変数投入法に基づく、日本人学習者の I 使用量に影響を与えうる要因

はじめに、本研究が対象とする 18 種すべての学習者要因を説明変数に組み込み、日本人学習者の I 使用量を説明するためのモデルの構築を試みる。そこで、全変数投入法に基づく、重回帰分析を実施した結果、表 3 で示した、18 種の学習者要因のうち、Primary、Secondary、College、Inschool、Outschool、Listening、Reading、Speaking、Writing の VIF 値が 10 を上回っており、多重共線性が確認された。そのため、これらの変数を削除し、再度、全変数投入法

による重回帰分析を実施した。その結果以下の重回帰式が得られた。

$$I \text{ 使用量} = -5.643 + 0.801 \text{ Age} - 0.006 \text{ TOEIC} + 0.012 \text{ VST} + 0.344 \text{ INTM} - 1.004 \text{ INSM} \\ + 0.399 \text{ NS} + 0.211 \text{ Pronunciation} - 0.166 \text{ Presentation} - 0.021 \text{ EssayW}$$

上記の重回帰式において、Adjust $R^2 = .077$ であり、元データの約 7.7%が上記のモデルで示されている。モデル全体は有意ではないものの ($p = .06$)、Age(学習者の年齢) ($t(89) = 2.177, p = .032$)と INSM(道具的動機づけ) ($t(89) = -2.245, p = .027$)の 2 変数において、5%水準で有意性が確認された。加えて、上記の各説明変数の標準化係数を値の高い順に整理した結果、下表のようになった。

表 4. 説明変数ごとの標準化係数の比較(全変数投入法)

変数名	標準化係数	各変数の有意性	VIF
Age	0.241	$t(89) = 2.177, p = .032$	1.305
NS	0.165	$t(89) = 1.517, p = .133, ns$	1.252
Pronunciation	0.094	$t(89) = 0.791, p = .431, ns$	1.498
INTM	0.079	$t(89) = 0.710, p = .479, ns$	1.318
VST	0.019	$t(89) = 0.151, p = .881, ns$	1.612
EssayW	-0.009	$t(89) = -0.068, p = .946, ns$	2.086
Presentation	-0.078	$t(89) = -0.661, p = .510, ns$	1.495
TOEIC	-0.194	$t(89) = -1.378, p = .172, ns$	2.101
INSM	-0.235	$t(89) = -2.245, p = .027$	1.165

上表を概観すると、標準化係数が低い INSM(道具的動機づけ)や TOEIC といった、インプット型の英語学習に関する要素は、符号が-となっている。特に、5%水準で有意性が確認された INSM に関して、道具的動機づけに基づく英語学習は、学習教材における比較的かたく客観的な英文からのインプットに偏る可能性が考えられ、結果的に、主観的な人称代名詞 I の使用を抑制している可能性がある。一方で、有意ではないが、符号が+である NS(母語話者からの指導経験)や Pronunciation(発音指導経験)、INTM(統合的動機づけ)といった要素は、実際の英語使用に結びつくアウトプット型の英語学習に関連する可能性が考えられる。Age(年齢)の標準化係数の値が最も高く、かつ 5%水準において有意な説明変数となっている理由については、慎重な考察が必要であるが、上表の変数の並びに基づけば、年齢が学習者の実際の英語使用に一定の影響を与えている可能性がある。

4.2 RQ2 ステップワイズ法に基づく、日本人学習者の I 使用量に影響を与える要因

RQ1 では、全変数投入法を適用することで、多くの学習者要因を可能な限りモデルに取り込んだが、結果として得られたモデルは有意ではなく、統計的な妥当性が決して高いものであるとは言えない。そこで、同様のデータに対して、ステップワイズ法を適用した重回帰分析を実施することで、より妥当性の高いモデルの構築を試みた。その結果、日本人学習者全体の I 使用量を説明する、

以下の重回帰式を得ることができた。

$$I \text{ 使用量} = 7.726 - 1.037 \text{ INSM} + 1.830 \text{ College} - 1.614 \text{ Reading} + 0.427 \text{ NS}$$

上記の重回帰式において、Adjust $R^2 = .135$ であり、元データの約 13.5%が上記のモデルで示されていることになる。また、モデル全体は有意であり($p = .001$)、さらに切片 ($t(94) = 3.397, p = .001$)、INSM(道具的動機づけ) ($t(94) = -2.562, p = .012$)、College(大学での英語学習量) ($t(94) = 2.968, p = .004$)、Reading(リーディング学習量) ($t(94) = -2.493, p = .014$)は有意であった。なお、NS(母語話者からの指導経験) ($t(94) = 1.832, p = .070$)は有意ではなかった。加えて、上記の各変数の標準化係数を値の高い順に整理した結果、下表のようになった。

表 5. 説明変数ごとの標準化係数の比較(ステップワイズ法)

変数名	標準化係数	有意性	VIF
College	0.415	$t(94) = 2.968, p = .004$	2.216
NS	0.176	$t(94) = 1.832, p = .070, ns$	1.049
INSM	-0.243	$t(94) = -2.562, p = .012$	1.017
Reading	-0.353	$t(94) = -2.493, p = .014$	2.271

上表を概観すると、標準化係数の符号が+の College や NS は実際の英語使用場面におけるアウトプット型の学習に関与する要素であると推測される。特に College は有意な変数であるが、大学での英語学習は、小学校から高校までの英語学習以上に、アウトプット型の学習に関連しているのではないだろうか。人称代名詞 I は一般的に会話を中心として使用される表現であるため(Biber et al., 1999)、アウトプット型の学習が、学習者の I 使用に影響を与えている可能性が考えられる。一方で、符号が-である INSM や Reading は、インプットに偏る英語学習に関与する要素と考えられ、学習者の I 使用を抑制する要因となる可能性がある。

4.3 RQ3 ステップワイズ法に基づく、習熟度別日本人学習者の I 使用量に影響を与える要因

ここまで、本研究が対象とするすべての英作文に関して、日本人学習者の I 使用量に影響を与える学習者要因の考察を行った。RQ3 では、さらに、学習者を習熟度段階別に分類し、ステップワイズ法を用いた重回帰分析を実施した。その結果、習熟度段階ごとに、以下の重回帰式を得ることができた。

表 6. 習熟度段階別にみる日本人英語学習者の I 使用量モデル

習熟度	重回帰式
A2	I 使用量 = 16.652 - 1.761 INSM - 0.150 VST
B1_1	I 使用量 = -1.639 + 4.467 College - 3.617 Outschool + 1.387 NS - 0.925 EssayW
B1_2	I 使用量 = -3.716 + 2.660 Speaking
B2+	ステップワイズ法による有意な説明変数はなし

上表の通り、A2、B1_1、B1_2 の学習者に関しては、重回帰式を得ることができたが、B2+に関しては有意なモデルを得ることができなかった。下表は、上記のモデルに関して、Adjust R^2 、モデルの有意性、各説明変数及び切片の有意性に関する情報を整理したものである。

表 7. 習熟度別学習者の I 使用量モデルの妥当性

習熟度	Adjust R^2	モデルの有意性	説明変数及び切片の有意性		VIF
A2	0.220	$p = .012$	INSM	$t(28) = -2.809, p = .009$	1.002
			VST	$t(28) = -1.734, p = .094, ns$	1.002
			切片	$t(28) = 4.821, p = .000$	
B1_1	0.384	$p = .001$	College	$t(31) = 4.014, p = .000$	2.172
			Outschool	$t(31) = -2.954, p = .006$	2.476
			NS	$t(31) = 3.048, p = .005$	1.288
			EssayW	$t(31) = -2.058, p = .048$	1.385
			切片	$t(31) = -0.532, p = .599, ns$	
B1_2	0.268	$p = .016$	Speaking	$t(16) = 2.687, p = .016$	1.000
			切片	$t(16) = -1.013, p = .326, ns$	

いずれのモデルについても、少なくとも元データの 20%以上を説明しており、有意である。得られた 3 種の重回帰式を構成する変数を、RQ2 で得られた、日本人学習者の作文全体における重回帰式を構成する変数と比較すると、INSM(道具的動機づけ)の有意性は特に初級学習者にみられることが分かる。INSM に関しては、RQ1 と RQ2 で得られた 2 種の重回帰式の両方において有意な変数として確認されたが、初級学習者の I 使用量は、道具的動機づけに基づくインプット型学習の程度に影響されやすい可能性がある。また、College(大学での英語学習経験)の有意性は特に中級の B1_1 の学習者に見られることが分かる。NS に関しては、RQ2 のモデルでは有意な変数ではないものの、B1_1 の学習者に限定すると有意な変数であることが確認された。これら 3 種の変数は、RQ2 の重回帰式にも確認されたものだが、その他の変数を見ると、B1_1 では Outschool(学校外での英語学習量)と EssayW(ライティング指導を受けた経験)がともに-の符号を有し、有意な変数として機能し、B1_2 では Speaking(スピーキング学習量)が+の符号を有し、有意な変数として機能している。EssayW については、書き言葉的な英語のインプットに関連する要素と考えられ、学習者の I 使用量を抑制する可能性がある。その一方で、Speaking については、発話によるアウトプット型の英語学習に関する要素であり、学習者の I 使用を促進する要因となっている可能性がある。Outschool については、日本人学習者の学校外での英語学習はインプットに偏る傾向があるために、結果として符号が-となり、学習者の I 使用を抑制している可能性がある。

4.4 総合考察:RQ で示されたモデルの妥当性の検証

ここまで、計量的な観点から、日本人英語学習者の I 使用量に影響を与える学習者要因に関して考察を行った。では、上記のモデルで示された傾向が、実際の英作文にも見られるのだろうか。

ここでは、対象とした日本人学習者全体の作文に基づくモデルと、A2 に限定した日本人学習者の作文に基づくモデルの両方において、有意な変数として機能する INSM(道具的動機づけ)をサンプルに評価を行う。まず、ICNALE Learner Background Survey Sheet の情報に基づき、A2 レベルの日本人学習者コードのみを抽出し、さらに、INSM の低い順にそれらを並び替えた。その結果、最も INSM の低い学習者コードが WE_JPN_007 (INSM=1.83) であり、最も高い学習者コードが WE_JPN_076 (INSM=5.33) であることが示された。そこでこれら 2 種の作文を引用し、I 使用量の比較を行う。

“*I* agree with it. *I* have three reasons to support my answer. Firstly, *I* think we should have a part-time job to learn how work before employed in a company. We go to a university to learn many things before employed and we have much time to do something after classes. We can choose whether we have a part-time job to learn how work or not. So we should have it. Secondly, *I* suppose we should know how hard earning is. *I* had not known that earning money to live is really hard since *I* have had part-time job. And *I* could thank my parents. *I* think it is important for us to know how hard earning and thank parents. Thirdly, we can use payments of part-time job to do many things for experiences. As *I* said we have much time in a university. And we can do something for ourselves by using payments of part-time job. For example, we can go travel and see the world, buy books, organize a student conference and so on. *I* think that experiences will help us after graduate. So *I* agree that is important for college students to have a part-time job. Because we can learn how work, we can know how hard earning is and we can get good experiences thanks to part-time job.” (WE_JPN_PTJ0_007_A2_0)

“*I* agree that college students have part time jobs. Do we only study in college? No, *I* don't think that. Of course if you work in part time jobs too hard and don't study in college, it is too bad but part time job in itself is not bad thing, because *I* will show you why it is. First, you can experience many things that you can't experience in college. For example you can teach math, English and science for high school or junior high school students. In part time job, you can discover your new sides. Second, we can enter new community. For example senior manager will tell you how to communicate customers, also you must tell youngers it too. Finally you will utilize its experiences for your own work in the future. Of course what you have learned in college is the most important to enter a company which you want to enter. But after entering, you may utilize what you have learned in part time job. If you don't have its experiences, you can't cope with many kinds of works or problems, for example how to communicate olds or youngers or solve some accidents which you don't think happens, however if you have it, you can act quickly and flexibly. Part time jobs have these good sides so college students work, if they don't forget to study.” (WE_JPN_PTJ0_076_A2_0)

2 種のいずれの作文も、大学生のアルバイトについて、肯定的な立場を示している。しかしながら、INSM の低い前者 (WE_JPN_007) は、頻繁に I を主語にした文を使用しており、一つの作文に 11 回も I を使用している。一方で、INSM の高い後者 (WE_JPN_076) については、前半の主張部において I を 3 回使用しているが、後半では二人称代名詞の you を多用することで、作文全体で I をそれほど使用していない。RQ2 及び RQ3 (A2) のモデルにおいて、INSM の係数の符号は - である。すなわち、INSM が高いほど、I 使用量が減少することを示唆する。同様の傾向が、個

別の英作文においても見られ、本研究が提示した重回帰式と部分的に関連しているといえるのではないだろうか。

5. まとめ

本研究では、日本人英語学習者の英作文における人称代名詞 **I** の使用量には、どのような学習者要因が影響しているのかを明らかにすることを目的とし、3つの **RQ** に基づき、調査を行った。

RQ1 では、全変数投入法による重回帰分析を実施し、対象とする18種の学習者要因(説明変数)を可能な限り組み込んだモデルの構築を行った。その結果、モデル全体の統計的妥当性は低いものの、**INSM**(道具的動機づけ)のような、インプット型学習に偏る可能性のある変数が、**I** 使用量を減少させる可能性があるという示唆を得た。

RQ2 では、**RQ1** と同一のデータに対して、ステップワイズ法による重回帰分析を実施し、より統計的妥当性の高いモデルの構築を試みた。その結果、**College**(大学での英語学習量)といったアウトプット型の学習に関与する可能性の高い変数が、学習者の **I** 使用量の増加に影響し、**INSM** や **Reading**(リーディング学習量)といったインプット型の学習に関連する変数が学習者の **I** 使用量を減少させる可能性があることが示された。

RQ3 では、学習者の作文を4種の習熟度段階別に分類し、ステップワイズ法による重回帰分析を実施した。その結果、**RQ2** で示されたモデルに含まれる変数が、いずれかの習熟度段階におけるモデル中においても、同じ符号(+/-)を伴って出現した。また、習熟度段階別に検証したことで、**B1_1** の **Outschool**(学校外での英語学習量)と **EssayW**(ライティング指導を受けた経験)(いずれも符号は-)や、**B1_2** の **Speaking**(スピーキング学習量)(符号は+)といった、習熟度別に調査をしたことではじめて取り出された説明変数も存在したが、アウトプット型の学習に関与すると思われる変数は学習者の **I** 使用を促進し、インプット型の学習に関すると思われる変数は **I** 使用を抑制するという点においては共通しているのではないだろうか。

本研究は、日本人英語学習者によるスタンス表出(特に **self-mention** 表現)の一側面を、学習者要因を踏まえて考察した。本研究により、学習者の語彙使用が、学習者の内面的な要因に間接的に影響される可能性が示された。しかしながら、本研究には一定の課題も存在する。まず、学習者データを習熟度別に見た場合、習熟度段階ごとにデータ数にばらつきが生じるという点である。特に **B2+**の学習者の作文数は14であり、**A2**の作文数の約2分の1である。そのため、データの規模が結果に影響を与えた可能性は否定できず、より妥当な結果を得るためには、各習熟度段階における作文数を統一する必要があるだろう。次に、トピックの制約である。本研究では、1種のトピックに関する作文(「大学生アルバイトの是非」)に限定して調査を行った。そのため、本研究で得られた結果が、トピックそのものの影響を受けている可能性も否定できない。**ICNALE** には「レストランにおける全面禁煙の是非」という他のトピックの作文も収録されており、そちらでも同様の結果が出るか検証をする必要があるだろう。最後に、本研究の **RQ3** において、**B2+**レベルの学習者の作文からは学習者の **I** 使用量を予測するための、妥当なモデルを得ることができなかった。この点については、**B2** 以上の上級学習者は、他の習熟度の学習者とは異なる **I** 使用をしている可能性が

考えられる。しかしながら、本研究ではその点までは深く考察ができていない。以上 3 点を本研究における課題と今後の研究への示唆としたい。

引用文献

- Biber, D., Johansson, S., Leech, G., Conrad, S., & Finegan, E. (1999). *Longman grammar of spoken and written English*. Longman.
- Firdaus, S. F., Soemantri, Y. S., & Yuliatwati, S. (2021). A corpus-based study of self-mention markers in English research articles. *International Journal of Language Teaching and Education*, 5(2), 37-46.
- Hyland, K. (2005). Stance and engagement: A model of interaction in academic discourse. *Discourse Studies*, 7(2), 173-192.
- Ishikawa, S. (2023). *The ICNALE guide: An introduction to a learner corpus study on Asian learners' L2 English*. Routledge.
- 石川慎一郎・前田忠彦・山崎誠(編)(2010). 『言語研究のための統計入門』. くろしお出版.
- 川口恵子・伊東田恵・太田理津子(2015). 「非母語話者の英語教育研究者の論文における第 1 人称代名詞の使用と認識について」『関東甲信越英語教育学会誌』, 29, 57-70.
- 小林雄一郎(2010). 「日本人英語学習者の英作文における人称代名詞について」『言語処理学会第 16 回年次大会発表論文集』, 1074-1077.
- 成田真澄(2017). 「日本人大学生が産出した英語論述文における主格人称代名詞使用傾向の分析」『東京国際大学論叢 人文・社会学研究』, 2, 1-20.

コーパス

ICNALE: The International Corpus Network of Asian Learners of English.
<https://language.sakura.ne.jp/icnale/>

コンコーダンス

AntConc (4.2.4). Laurence Anthony's Website.
<https://www.laurenceanthony.net/software/antconc/>

フリー統計分析プログラム

HAD (ver.18). <https://norimune.net/had>

